認知症を〝一発診断〟

図形触って角度識別

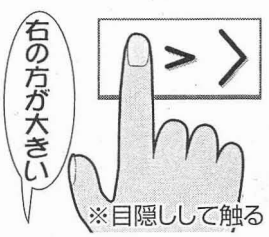
岡山大が開発

図形の角度の違いを、指で触ってどれくらい正確に識別できるかを測定することによって認知症を早期発見する手法を、岡山大の呉景龍(ごけいりゅう)教授らが開発した。

2本の直線が「く」の字になっている図形を浮き彫りにしたアクリル板（幅4㌢）を使用。角度が64度から110度までのいずれかになっている図形と、基準となる60度の図形が二つ並んでおり、診断を受ける人は目隠しをして、人さし指で図形を触り、どちらの角度が大きいかを答える。

70～80歳代の男女でテストを実施。「健康」「軽度の認知症」「進行した認知症」のグループに分けて結果を分析すると、健康では平均8・7度の違いを読み取れたが、軽度の患者は13・8度、進行した患者は25・2度で、識別能力にはっきりと違いがあった。

触覚情報の入力や短期の記憶など一連の脳内活動が必要な行動のため、認知症患者では精度が落ちると考えられる。

早期の診断法として問診テストがよく行われるが、個人の生活環境の違いが大きく影響するなど、客観性に問題がある。研究チームは今後、小型の診断装置を開発し、医療機関での検査や高齢者が運転免許更新時に受ける認知機能検査などへの利用を目指す。

認知症を早期発見する検査